



二〇二二年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念



新縁起

第31回 享和の火災



四天王寺 勸学部 文化財係主任・学芸員 一本崇之

暁の丑の刻(午前1時〜3時)のことであった。雨がふれるように激しく降って、とどろく雷に眠ることができなかつた。寝床にうずくまっていたと、雷鳴が3回ほど響いて、襖からみしみし音がするので、南の方に雷が落ちたのだらうなと思っていた。と、ほどなくして雨がやんできた。寅一つの頃(午前3時過ぎ)、「火事だ」と人々の騒ぐ声があるので、急いで屋根の上に登ってみると、どうやら上寺町のあたりらしい。風に吹かれて空に炎の上がっているのは、どこかの寺院だろうか。いつも見えている天王寺の五重塔は暗くてよく見えない。されど南の方の雨雲にうつろう火影は、さながら昼のようであったが、わが家からは距離があるうえ、西風が強くて肌寒く、寝間着を被って眠りに付いた。夜が明けて、外にいた人々の話を聞くと、「天王寺に雷火があつて、諸堂がごとごとく焼けてしまった。いま目の前で釘無堂(宝蔵)が焼けるのを見てきたところだ」というので、こんなに名高い寺がよもや諸堂残りなく焼けてしまうことなどないだらうと思いつつ、役所に赴いた。

享和元(1801)年12月5日、夜中の激しい雷雨のさなか、四天王寺の五重塔に雷が落ちました。五層

冒頭の文章は、幕府の官僚として大坂に赴任していた大田南畝(蜀山人)の日記『蘆の若葉』の一節です(現代語訳は筆者、以下同じ)。南畝は赴任して以来、折に触れて四天王寺を参詣し、その様子を日記に細やかに記していました。そんな足しげく通つた四天王寺が焼亡したというのです。一夜明け、南畝は四天王寺に向かいました。



「大坂四天王寺雷火之次第」大阪歴史博物館蔵

2022年1・2月号
号外 1
2022

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

て、煙がもくもくと立ち込めていて、先に進めそうにない。(中略)東門のみ焼け残っているが、講堂・金堂のあたりにも黒煙が立ち上り、これがともともとの堂であつたか見分けもつかない。さらに進むと、塀だけが残っているの、「ここはどういう堂宇だったのか」と聞くと、「ここは太子堂であつた」という。かの猫の門・虎の門の彫物も失われたのだらうと思いつつ、十五社・繪堂も跡形なく、雲水塔と呼ばれた五重塔もここに建っていたのか、はつきりとわからないほどであった。

この火災により、四天王寺は境内東半分ほどの堂宇を焼失してしまします。わずかに焼け残つたのは、当時、西大門南方にあつた五智光院や万燈院、元三大師堂など推寺の建物、そして東大門を数えるのみでした。元和再建以来180年にわたる平穏な時代が突如終わりを告げ、四天王寺は再び苦難の道を歩むことになりました。

らくご ハローワーク



相羽秋夫の

第1職 あれやこれ人を仕分ける『口入屋』

うと試みるが、棚の紐が切れて、棚を肩で担ぐ羽目になる。手代も同じことを考え、同じ方法で上に乗がろうとして、同じようにもう片方の棚を担ぐことになる。物音に気付いたご寮人さんが「そんな所で何してなはる」と問うと、寝たふりをした2人「へえ、宿替の夢見とります」

御大家(ごたいけ)では、部屋を片づけや旦那一家の身の廻りを世話する上(かみ)女子衆と、炊事・洗濯・清掃を受け持つ下(しも)女子衆があつた。この断では、上女子衆のことだらう。

番頭は、バワハラとセクハラと強姦未遂の罪に当たるのか、処分はどう下つたのか。女子衆は、この店を辞めたのか。口入屋に抗議したのか。断の先はさっぱり分からない。落語は、桂枝雀流に言うように、緊迫した状況をオチで一気に解消する「緊張の緩和」が身上である。この先の物語は、どうぞあなたが、思い描いてほしい。

筆者は、13年間に及ぶマネージャー業をしていた松竹芸能を円満退社し、当時の公共職業安定所(現ハローワーク)に、「放送作家」の職を求めたことがある。そんな求人が見つかるともなく、10か月も失業保険で生活した、切ない過去を持つ。

世の中には、9万近い職種があるという。わが落語にも、さまざまな職業が登場し、生き生きと描かれている。それらの職業を紹介する1回目は、現代の人材派遣会社に当たる『口入屋』と称する上方落語である。



NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

各種予約・お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06-6779-7222

住まいと暮らしの無料相談会

弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士など当法人の会員が専門知識を生かし、無料でご相談に応じます。22年1月は、市立社会福祉センターの会議室が改装工事のため当法人・事務所随時対応します。電話もしくはHPよりお申し込みください(電話受付は10時〜15時。土日祝日は休業)。2月より再び、原則毎月第2土曜日(午前10時〜12時。市立社会福祉センターII天王寺区東高津町)で定例開催します。

2月の開催は2月12日です。

主催：NPO法人まち・すまいづくり
(市立社会福祉センター指定管理者)
電話：06-6779-7222
住所：天王寺区勝山1-11-29
後援：天王寺区役所

うえまち本

「歴博」で販売中

まち・すまいづくり編集・出版の刊行物が、大阪歴史博物館「ミュージアムショップ」で好評販売中です。

- 上町台地名所百景
- うえまち上町台地を想い観る
- うえまち第二集 上町台地と大坂夏の陣
- 夕陽丘まち談義「都市デザイン」の資源発掘
- うえまち「大坂の陣」特選集大坂の陣のとき一心寺は

うえまち寄席

2月26日(土)14時開演

桂佐ん吉、桂ちようばによる、上方落語発祥の地・上町台地にふさわしい、古典を中心とした落語会です。電話または電子チケット販売サイト「TIGET(チケット)」からも予約可能です。

場所：一心寺南会所(天王寺区逢坂2-7)
入場料：2000円



二〇二三年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第32回 文化の再建



四天王寺 勤学部 文化財係主任・学芸員 一本崇之

2022年1・2月号
号外 2022 2

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

むねたかき
いらかも灰となるかみの
ほのふにのころ軒の端もなし
大空にそびへし軒もやけはて、
げに雲水のあはれよの中
さだめなき
あをひとぐさのいましめや
けぶりとのぼる千代のふるでら
篠弼(篠崎小竹)

事業は難航します。そこで立ち上がったのが、大坂白銀町(現在の中央区東心斎橋1丁目)にて紙屑問屋を営んでいた淡路屋太郎兵衛(あわじやたるべえ)でした。
元来、篤信家であった太郎兵衛は、伽藍復興のために自身の全財産を投じますが、それでも足りなかったため、自ら勧進元となって、毎日四天王寺の境内に赴いては袴(かみしも)姿で土下座をして参詣者からの喜捨を募りました。またある時は、空の千両箱をいくつも牛車に載せて、寄進のようになみせる職を立てて市内を練り歩いたといえます。
このときの千両箱が現在も四天王寺に残されており、彼の猷身の活動の足跡を今に伝えます。



太郎兵衛らによる6年におよぶ勧進活動が徐々に

路上で仕事をしている鑄掛屋の所に近所の悪童どもが5、6人やってきて、からかい半分の質問をする。吹子の火を見て、「おったん、その青い火の中から幽霊出るんか」とか「おったん、あなたに連合(つれあ)いはおるんか」などの悪態をつく。中に1人おとなしい子どもがいるので鑄掛屋が「あなたは大いしいな」と誉めると、「うち病氣」とやり返す。ガキ大将とおぼし



日下部金兵衛撮影

「これから●●について書きます」などの前置きも読み手にとっては邪魔なものです。この程度ですれば「まだまし」ですが、何行にもわたって続けば読み手は飽きてしまうでしょう。
「かなり」や「とりわけ」といった具体的な中身がなく、抽象的で、なくても通じる修飾語もできるだけはよくないようにしましょう。不要なものは削って単刀直入に書く。それが読み手の理解を進める一番の近道です。
※本連載は「うまもり号外」掲載分以外も、Webでご覧いただけます(「フット うまもり」で検索)。

皆さんには3代目桂春団治の名口演で記憶に残る『鑄掛屋』は、春団治家に代々伝わるお家芸だ。現代では全く見られなくなった鑄掛屋が描かれる。穴が開いたりひびの入ったりした鍋や釜を、吹子(ふいこ)・送風機)で起こした火力で、しるめ(銅と亜鉛の合金)などを溶かして修繕する職業だ。店構えをせざる町々を回り作業した。
◇
路上で仕事をしている鑄掛屋の所に近所の悪童どもが5、6人やってきて、からかい半分の質問をする。吹子の火を見て、「おったん、その青い火の中から幽霊出るんか」とか「おったん、あなたに連合(つれあ)いはおるんか」などの悪態をつく。中に1人おとなしい子どもがいるので鑄掛屋が「あなたは大いしいな」と誉めると、「うち病氣」とやり返す。ガキ大将とおぼし

断は、このあと鰻屋からかい、山上詣りの途中の山伏にからんでいく。今では、後半部は上演されず、ご紹介した所でオチもなく終わる。物語がたわい無いので、緊張を解きほぐすオチが必要ないのである。
◇
夫婦又は男女が一緒に歩くことを、「いかけ」と呼んだ。江戸文化年間の大阪で、奥さんを助手にした鑄掛屋がいた。それを見た3世中村歌右衛門が、この夫婦をモデルにした歌舞伎『船打込橋間白浪(ふなうちこみはしまのしらなみ)』を発表したことから、夫婦や男女がそろって歩くことを「いかけ」と呼ぶようになった。夫婦で外出すると「今日はいかけでっか」と声を掛けられたという。それだけ男女が一緒に歩くことが珍しかった時代があった。
竹製の箆(ざる)である「箆籬(いかき)」を売る男の断(な)り掲げいかき」もあるのややこしい。別の機会にご案内するとして、独身生活の長い筆者と、どなたか「いかけ」してくれませんか。

私は彼の意見には反対です。時期尚早だと思っております。
「これから●●について書きます」などの前置きも読み手にとっては邪魔なものです。この程度ですれば「まだまし」ですが、何行にもわたって続けば読み手は飽きてしまうでしょう。
「かなり」や「とりわけ」といった具体的な中身がなく、抽象的で、なくても通じる修飾語もできるだけはよくないようにしましょう。不要なものは削って単刀直入に書く。それが読み手の理解を進める一番の近道です。
※本連載は「うまもり号外」掲載分以外も、Webでご覧いただけます(「フット うまもり」で検索)。

実を結び、資金の目途が立ったことから、文化4(1807)年より少しずつ再建が始まります。少ない資金の中で効率よく事業を進めるため、六時堂には境内北側にあった権寺薬師堂を移築し、講堂も焼け残った万灯院を移築するなどの工夫がなされました。また焼け残った建具や釘などの金物も使えるものはそのまま再使用するなど、徹底した経費の節減が図られたようです。
文化8(1811)年には、移築した講堂や六時堂へ仏像が搬入され、翌9(1812)年には金堂や仁王門などが落慶し、火災から11年を経たようやく伽藍復興が成し遂げられました。
伽藍復興を見届けた太郎兵衛は、文化10(1813)年に54歳の生涯を閉じます。四天王寺の復興に余生をかけて尽力した功績をたたえ、金堂には袴を身にまとった淡路屋太郎兵衛の木造が安置されました(写真。残念ながら、像は空襲で焼失)。

らくご ハローワーク
第2職 『鑄掛屋』は鍋釜直し飯を喰う
い子どもが、鑄掛屋の金槌を貸してくれ、と言うので断ると、怒って、大切な吹子の火を小便で消してしまふ。困り果てる鑄掛屋を尻目に、子どもたちは鰻屋を冷やかさうと、風のように去っていく。
◇
断は、このあと鰻屋からかい、山上詣りの途中の山伏にからんでいく。今では、後半部は上演されず、ご紹介した所でオチもなく終わる。物語がたわい無いので、緊張を解きほぐすオチが必要ないのである。
夫婦又は男女が一緒に歩くことを、「いかけ」と呼んだ。江戸文化年間の大阪で、奥さんを助手にした鑄掛屋がいた。それを見た3世中村歌右衛門が、この夫婦をモデルにした歌舞伎『船打込橋間白浪(ふなうちこみはしまのしらなみ)』を発表したことから、夫婦や男女がそろって歩くことを「いかけ」と呼ぶようになった。夫婦で外出すると「今日はいかけでっか」と声を掛けられたという。それだけ男女が一緒に歩くことが珍しかった時代があった。
竹製の箆(ざる)である「箆籬(いかき)」を売る男の断(な)り掲げいかき」もあるのややこしい。別の機会にご案内するとして、独身生活の長い筆者と、どなたか「いかけ」してくれませんか。

文章をすつきりと読みやすくするテクニクのひとつに「余分な言葉をはぶく」があります。例文だったら、「なぜかという」と「がなくても意味は通じます」。「その理由は」や「そのわけは」といった表現も、たいていの場合ないほうが読みやすい。むしろ、それらがあることにより、もったいぶった感じがして印象を悪くします。

大人のための
文章教室
ライター・編集者 松本正行
余分な注釈・修飾はないほうがいい
私は彼の意見には反対です。なぜかという、時期尚早だと思っております。
文章をすつきりと読みやすくするテクニクのひとつに「余分な言葉をはぶく」があります。例文だったら、「なぜかという」と「がなくても意味は通じます」。「その理由は」や「そのわけは」といった表現も、たいていの場合ないほうが読みやすい。むしろ、それらがあることにより、もったいぶった感じがして印象を悪くします。